■和　の　心

紀元六〇四年、聖徳太子によって判定された我が国の最初の憲法「十七條の憲法」の第一条には、「和を以て貴しとなす」といふ言葉がある。

この“和”といふ言葉の意味は、音楽で言ふ“ハーモニー”のことである。“和音”とか“和声”とかと言ふ時の“和”がこれである。異った音階の音声が入り混り、同じ音階の音声だけではとても醸し出すことの出来ない、深みのある音声となって響く事である。

どんなに美しい花でも、それだけでは単調である。豪華な花あり、可憐な花あり、濃艶な花あり、淡白な花あって世の中は美しいのである。人の世界も、いろいろな考への人が智慧を出し合ひ、議論し合って進歩発展して来たのである。それで、大聖孔子は「君子は“和”して同ぜず、小人は同じて和せず」と仰しゃってゐるのである。自分の意見に同調する者とだけしか仲良く出来ない人間は小人物であって、自分と意見を異にする人とも仲良く協調できるのが大人物なのである。

然し、孔子の国、中国では、この“君子”が必ずしも多くなかった。だからこそ、孔子は“和”の心の大切な事を強調したものであらう。これに比して、我が国では“君子”に満ち満ちてゐた。正に文字通り「和の国」だったのである。だから、「日東君子の国」と呼んだのである。

昨年の自民党の総裁選でも、安倍、竹下、宮沢の三氏が、互ひにあれ程強く総裁の座を望みながら、最後は中曽根首相に人選を一任し、その裁定に服して、決定後は笑ってお互ひに握手を交してゐる。これこそ“和”の精神の現れであり、「日本の心」である。かういふ姿は、外国人、とりわけ欧米人には理解し難いものだと思ふ。

このやうに、日本人は譲れるだけは譲るのである。譲って紛争を避けることに努めるのである。その典型的なものが、『古事記』に見られる「大国主命の国譲り」である。これは神話であって史実では無いとしても、「日本の心」を表してゐる事には間違ひない。

近くは、徳川慶喜の大政奉還がある。あのやうな大権移譲が、あのやうに自発的に行はれた例は、世界の歴史上にも他に見ることは出来ないのではあるまいか。あの時点では、徳川家はまだ我が国で最強の実力を維持してゐたのであるから。

また、江戸城の明け渡しにしてもさうであるが、アメリカ軍の日本進駐の際における日本人の対応にしても実に平和裡に行はれてゐる。これらはいづれも「和を以て貴しとなす」日本の心の現れだと思ふ。

だから、日本人を“好戦国民”のやうに見るのは、とんでもない見当違ひの見方と言はなければならない。ただ、どうしても争ひを回避することが出来ない、と判断した時には、命を懸けても断じて争ふのである。

太平洋戦争で、我が国の特攻隊がアメリカの軍艦に体当りして自爆したのも、争ふことの大嫌ひな日本人にして初めて出来た事だと私は思ってゐる。戦ひが好きな人間は、決してあのやうな作戦は立てない。立てるわけが無いと思ふ。

　それだから、一九四五年八月十五日、終戦を告げる天皇陛下の詔勅で、日本人は一斉に戦闘行為を中止し、武器を棄てゝ降伏したのである。好戦国民だったら到底考へられない事ではないか。しかも、全国民がアメリカの軍政に完全に服し、一人だって抵抗した者がゐなかったのである。こゝにも、「和を貴ぶ」日本の心がよく現れてゐると思ふ。

占領軍の軍政下に在って、日本国民ほど占領軍に協力した例は、世界の長い歴史の上でも他に見る事は出来ないだらうと思ふ。そして、これこそ日本人が“和”を貴び、平和を愛する国民であることを証明するものであると思ふ。